

第七章

繪馬の奉納

一 房総半島に伝来する伊勢信仰の繪馬

繪馬以前

神社の境内には参拝者が様々に願いを記した繪馬が奉納されていることがある。この繪馬は小繪馬と呼ばれ、個人の願意が記入されたものである。寸法にして三十センチ以下の小さいものを小繪馬と称す。

それに対して、同じ繪馬と呼ばれるものでも、拜殿の内部や繪馬殿などの特別な建物内に掲げられる大型の繪馬がある。この繪馬の画題は、馬・武者絵・参詣図・歌仙絵・物語絵など多岐にわたっていて、訪れるものの目を楽しませてくれる。当時の習俗や信仰の様子を探るには大変有意義な資料である。

繪馬と記すように、繪馬は馬と関わりが深い。古代において馬は乗用・軍用として貴重な動物であると同時に、神の乗り物として神聖視されていたという。神霊は乗馬姿で降臨すると考えられており、今でも京都の賀茂御祖神社の御蔭祭では、御蔭山から迎えた神霊を馬の背に奉安し錦蓋で覆い本殿へと進むが、まさに神が乗馬姿で降臨すると考えていた古式の祭祀であるといえよう。また奈良の春日大社の本殿には色鮮やかに馬の絵が描かれている。この絵も、神と馬とが関わり深いことを物語ると共に、神に馬を捧げるといふ風習の存在を示唆している。各地には英雄や武人の伝承に馬が登場する類の物語が多く伝えられているが、その中で馬を木に繋ぐといういわゆる「駒繋ぎの松」の伝承も、実は神と馬が密接なつながりを持つことを

語っている。それは神木と神馬、すなわち神霊の依り代である神籬と神霊の乗り物の関係

を語っているのである。神と繋がり深い馬を神前に奉納する習慣が発生してくるのは当然であり、実際に神馬を社頭で飼育し、神馬舎を設けてある神社もある。特に古社に多く神馬舎が見られるのは、神馬を社頭で飼育するのが古来の習慣であることを伺わせる。また、千葉県内でも祭礼に際して馬を神前に牽き入れたりして神馬を奉納する行状が残されている。この神馬奉納の事については、隣県である茨城県の伝承にも見られ、『常陸国風土記』には



人見津市人見 人見神社例祭の神馬牽引

初国知らしし美麻貴の天皇のみ世に至りて、奉る幣は、太刀一口、鉾二枚・鉄弓二張、鉄箭二具、許呂四口、枚鉄一連、練鉄一連、馬一匹、鞍一具、八絁鏡二面、五色の絶一連なりき。

とあり、鹿島神宮に崇神天皇の御代よりすでに神馬が奉納されていたことが記されている。他の文献にも神馬奉納の記事は枚挙に遑がないほど多く、古代において神前に馬を奉納する習慣が広く行われていたのである。

生馬奉納の風習と同じく、一方で生馬にかわって馬形を奉納する習慣もあった。『統日本紀』の神護景雲三(七六九)年二月乙卯の条に

大炊頭従五位下掃守生・左中弁従四位下藤原朝臣雄田赤呂を以て伊勢大神宮の使と為し、

社毎に男神の服一具。其太神宮及び月次の社には、之に加うるに馬形並びに鞍を以てす。という記事があり、当時馬形が奉納されたことが記されている。実際に日本各地では土馬が出土している。土馬の出土する場所も地域が多く、次いで古墳などが続くが、地域は勿論古墳であつても信仰の場であり神社出土と同様に見なすことが出来よう。馬形の奉納は、土馬に限らず木馬でも行われており神社に伝来している例もある。

絵馬の出現

これら神馬奉納や馬形奉納の風習がどのような形をたどつて絵馬へと変化するかを事物でもって論証するのは難しい。『神道名目類聚抄』において「神馬ヲ奉奉ル事及ハサル者、木ニテ馬ヲ造献ス」と木馬の奉納の起源を生馬に代えて木馬で奉納したと推測されるように、馬が貴重であるために、馬形を奉納することになったと考えられている。静岡県伊場遺跡では奈良時代の地層から、年紀銘のある木簡や土器と共に絵馬が発掘されている。縦七・三センチ、横八・九センチ、厚さ〇・五センチの横型方形の檜の板に墨で馬が描かれ、上端中央には紐穴があり、紐でつるした物であることは明白である。さらに、平安時代初期と推定される地層からも馬の図と思われる板片が三枚出土している。これも上部に紐穴が確認でき絵馬であることは間違いない。しかも長方形の方形で奈良時代の物と同じ形状である。この絵馬は、曲物の廃材を利用して作られており、材を曲げるために入れた線刻が残されている。このことから下級の者により製作されたことが推測され、平安時代には絵馬がかなり広い範囲に普及していたことを思わせる。

文献上では、『西宮記』巻五駒牽の条に、延喜十(九一〇)年十月の記録に秩父の牧場に賜つた「馬形絵」の記事が見える。また、『本朝文粹』巻十三に寛弘九(一〇一二)年六月二十五日大江匡衡が北野社に奉納した際の目録に「色紙絵馬三匹」と記されていることから、平安時代中期には絵馬が存在することが広く行われていたことがわかる。

十二世紀に活躍した常盤光長の筆による絵巻を模写したとされる『年中行事絵巻』第十一巻第三段には、今宮社の祭礼の場が描かれている。そこで描かれている社殿の正面左右の扉には、鏡と共に上部がゆるく山形に加工された絵馬が掛けられていることが確認できる。

また、永仁四(一二九六)年の詞書きを持つ『天狗草紙絵巻』東寺の巻第一段には、東寺中門の回廊にある小堂が描かれている。この堂内にも牽馬図の絵馬が八枚描かれている。形状は長方形で上部は丸みを帯びている。絵巻の作期も詞書きと同時代と推定されているので、絵馬の風習も当時の実状を描いたものと考えられる。

同時代の鎌倉時代後期の絵馬の現物が奈良の当麻寺や秋篠寺の天井裏から発見されている。当麻寺の絵馬は、昭和三十二年から三十五年にかけての曼荼羅堂解体の際に発見され、その数は七枚である。いずれも紐穴が確認でき、絵馬の上部をやや丸くしたり両肩落としにした檜板を加工して作られている。

絵馬の仕様の上から見ると、伊場遺跡出土の奈良時代・平安時代初期の遺物と推定される絵馬は方形であるのに対し、鎌倉時代の『年中行事絵巻』や『天狗草紙絵巻』に描かれた絵馬や当麻寺・秋篠寺より発見された絵馬は、いずれも上部を丸みを帯びていたり、両肩落しに加工されていたりして、明らかに時代と共に形状が変化してゆくことが確認できる。

やがて、室町時代に入ると、画題も馬だけでなく、様々なものが描かれ出すようになり、形

も扇面形や変形絵馬が現れてくるようになる。大きさも暫時大型化してゆき漆絵のように技巧を凝らした絵馬もある。

参詣絵馬

江戸時代中期以降、街道や宿場の整備による交通の発達や貨幣経済の浸透、また娯楽への希求などにより、遠隔地の社寺参詣の旅が起こってきた。庶民の旅は、熊野詣、西国三十三カ所巡礼、四国八十八カ所巡礼、秩父札所参り等の霊場の旅が主たるものであった。当時の参詣の旅は多くの困難を伴うものであるとともに、講を組んで積み立てをしながら、村の代表として一生に一度参詣できるという一大イベントであった。この旅にくじ引きなどで代表に決まった人々は、次に行く人のために旅日記である道中記を記したり、旅の様子を絵馬に描かせ社寺に奉納したりするようになってくる。この、参詣の旅の様子を描いた絵馬が参詣絵馬である。参詣絵馬には、旅の途中の出来事や風景、また参詣した社寺の境内や奉納する神楽の様子などが描かれている。

参詣絵馬からは当時の庶民の旅や日常生活を垣間見られるとともに、当時の信仰生活の有様を如実に知ることが出来る。特に、江戸時代に周期的に繰り返されてきた神宮への大規模な参詣であった御陰参りに関する参詣絵馬も全国的に多く見られる。千葉県内でも絵馬・額を含めると三百点以上の伊勢参官に関する絵馬・額が確認されている。

神話を描く絵馬

軍記物語文学・歌舞伎などのモチーフは、絵馬にも多く描かれ、源頼光の四天王の話、楠公親子図など物語絵を描く絵馬が多く伝えられている。特に、源平の合戦などの武者が登場する絵は庶民のヒーローとしてアクロバティックな奮闘の構図に描き出され、社頭に掲げられていた。これらの絵馬は、訪れる参拝者を深く魅了して引き寄せたことは想像に難くない。同様に、我が国の始源を語る神話にも多く取材しており、絵馬に描かれたシーンを元に参拝者に神話を語り説くことも広く行われていたであろう。八岐大蛇退治絵馬などには、素戔鳴尊の迫力ある姿と生々しいまでの八岐大蛇が描かれ、源平合戦絵馬に登場する武者にもおとらなない迫力で語りかけてきたりする。これら、神話にまつわる絵馬類も社寺参詣絵馬と共に信仰を深る上で欠かせない資料となる。

伊勢参詣絵馬

千葉県内の社寺にはおよそ六千点の絵馬が伝来しており、その中で社寺参詣図・及び社寺参詣記念額はおよそ一千点を数える。これは、図柄としては拝み図に次いで二番目に多い。

県下に残されている初期の伊勢参詣絵馬の一つに、文政十二(一八三)年の「伊勢神宮参詣図」がある。この絵馬は、堤派の絵師である堤等川の筆によって描かれた物で、市原市八幡の飯香岡八幡宮に所蔵されている。県内で最も古い伊勢参詣図絵馬である。

堤等川は、『増補浮世絵類考』によると初代堤等琳の門人であり、巢鴨で絵馬屋を開業して

いたといわれている。飯香岡八幡宮には享和二（一八〇二）年の堤等舟の朝比奈三郎義秀・曾我五郎草摺曳図をはじめ堤秋泉・堤等国・堤等園等、江戸堤派の絵師の絵筆による絵馬が多く伝来している。浮世絵師系の絵師たちが描いたこれらの絵馬は、素人風の絵馬が多くある中でひとときわ光彩を放つ存在であり、飯香岡八幡宮のように地方の中心的神社に参詣する折に、社頭に掲げられた立派な大絵馬を見ることは近隣の人々の身近な楽しみであり、隣村に先駆けてそれらを奉納する事は村人の誇りであったに違いない。

伊勢への参宮は、村を挙げての一大事業であり、大がかりなこの事業の完遂を誇らしげに示すためにも、名だたる絵師に依頼して飯香岡八幡宮社頭に伊勢神宮参詣図を奉納したのである。この絵馬には、参宮した十二名の名前が記され、彼らが旅する風景が描かれている。旅人たちが体験した道中を、帰郷後多くの人たちに伝えるのに一役果たしたことであろう。時恰も、文政十二（一八三）年はおよそ六十年周期で飛躍的に御陰参りが増加する年であり、飯香岡八幡宮周辺の地域ではこの頃より伊勢講が結成され伊勢参りを行っていたと考えられている。

同じく市原市島野の島穴神社には弘化四（一八四七）年の長亭徳寿筆による「伊勢神宮内宮参拝図」、五井の大宮神社には文久二（一八六二）年の昇亭北寿筆による「伊勢神宮参詣図」がそれぞれ伝来しており、飯香岡八幡宮の堤等川の絵馬と比較して考えると興味深い。互いに競い合って伊勢神宮に参詣し絵馬を奉納した姿が想像できる。絵師の系統を変えて描かせてい



飯香岡八幡宮 伊勢神宮参詣絵馬

る事にも注目できる。昇亭北寿は江戸両国の絵師で、葛飾北斎の門弟として名高い。長亭徳寿は北寿の門人であり、社殿改修を翌年に控えた島穴神社では、改修成就の祈願のために参宮しその姿を徳寿に描かせたと考えられている。島穴神社・大宮神社の絵馬は、双方とも神宮に難路を克服し参宮した瞬間を描いており、両者の絵馬の構図は酷似している。この構図の酷似から見ても、昇亭北寿と長亭徳寿が師弟関係にあったことをうかがい知ることが出来る。飯香岡八幡宮の伊勢参宮絵馬とは内容が大きく異なることにも注目できる。

船橋市西船の妙見神社には「雪舟十五世筆孫雪山堤秋月筆」と落款が入った絵馬がある。雪山堤秋月は三代目堤等琳の別名であるが、この絵馬は明治十三（一八八〇）年に製作されており活躍時代が異なること、また三代目等琳は雪舟十三世を名乗っている事等から、この絵馬の作者が三代目堤等琳とは考えられず堤等琳の流れを汲む絵師の手によるものと推定される。

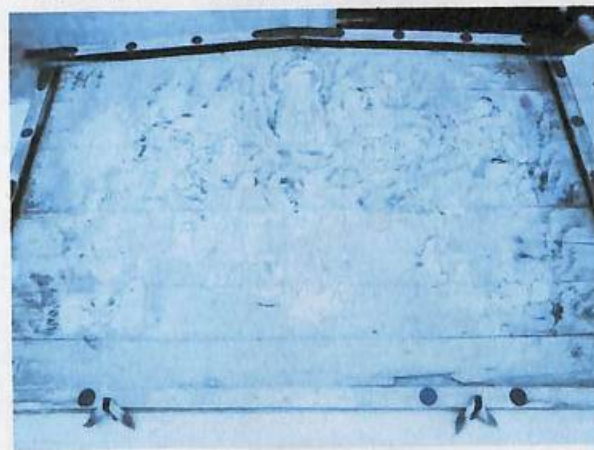
後期堤派の絵師は幕末から近年に至るまで市原市姉ヶ崎を中心に活動を繰り広げてゆく。内房の諸社に残されている近世の絵馬の多くが堤を名乗る絵師の手によって描かれている。市原市姉ヶ崎の際物業を営んできた辻家では、代々堤を名乗り絵師を世襲して絵馬の製作に携わってきた。初代の堤等月（辻豊次郎）は、江戸で三代目堤等琳に師事し絵師として活躍した。雪山の襲名を許された絵師である。その後も二代目堤等義（辻義太郎）・三代目堤等儀（辻儀三郎）と三代にわたって絵馬の製作を続けてきた。代々雪山を襲名し、辻家で制作した絵馬には姉ヶ崎齋雪山と記されている落款も多数伝わる。袖ヶ浦市高谷の春日神社蔵の明治八（一八七五）年の堤等月筆「伊勢神宮と二見浦図」、袖ヶ浦市蔵波の八幡神社蔵の明治十一（一八七八）年の堤等義筆「富士両宮参拝図」、袖ヶ浦市久保田の八幡神社蔵の昭和十七（一九四二）年の堤等儀筆「伊勢神宮参拝記念図」などが残されている。際物業を営む傍ら、絵師としても名前を世

襲しながら活動していたことをうかがわせる資料である。県内に伝来する堤等義筆の絵馬は現在十九点確認されており、今村春雪の三十点に次いで多い。

文政九（一八二六）年、船橋市五日市に生まれた吉橋秋月は江戸深川で三代目堤等琳に師事した画家である。船橋にて絵を教授し、絵師を育成したと伝えられている。東葛飾郡全域にわたって、経歴の判明しない絵師による絵馬が多数伝来しており、今後吉橋秋月の研究と共に調査が進むことが期待される。吉橋秋月の筆による絵馬が故郷の船橋市高根町の神明神社に残されていたが、火災により焼失してしまった。吉橋秋月は堤派に属し活動していた作家であり、船橋市西船の妙見神社の絵馬の作者「堤秋月」なる人物との関連は再度探り直す必要がある。流山市北の香取神社には歌川芳萬なる人物の筆による「太々神楽奉納図」という絵馬が伝来する。歌川芳萬は歌川系譜上では確認できない人物であるが、歌川国芳の流れをひく絵師と考えられ歌川派の伝播にも注目される。

岩戸図絵馬

南房総市千倉町南朝夷の高家神社には明治十五（一八八二）年に製作された「天岩戸図」が伝来する。これは、地元の絵師川名楽山の筆によるものである。実際に伊勢に参詣した光景を描くのではなく、神話天の岩戸の場面を描き出している。画面の中央の上部には岩戸より出御される天照大神が、周囲には賑わう神々が描かれている大作である。川名楽山は狩野



高家神社 天岩戸図

派に属する館山藩御用絵師であり、安房地方を中心に十一名の絵馬が確認されており、県内に伝来する絵馬作者では四番目に多い筆者である。

館山藩士であった川名楽山は、廃藩置県後も引き続き館山軒に出仕していたが明治四（一八七一）年館山県が木更津県に編入されると、離縁し、明治五（一八七二）年十一月以降は安房神社に奉職し明治八（一八七五）年に禰宜に任ぜられ教導職小教正まで累進した。

明治維新に始まって版籍奉還・廃藩置県へと発展した時代の激動は画壇にも大きな変革をもたらし、それまで大名の強い庇護の元で成り立っていた御用絵師たちは生活の基盤を失い、欧化政策のなかでなりをひそめていた。高家神社所蔵の絵馬が描かれた明治十五（一八八二）は、欧化政策にあった明治政府が伝統文化の復興に力を注ぎ始めた時期である。伝統絵師達が内国絵画共進会（明治十五年・同十七年開催）をめざして本格的に活動を再開し始めた時期である。国内の画壇の大きな動きを受け楽山も活発に活動していた時期である。

川名楽山は、画業への取り組みと共に狩野派の画法の教授にも熱心であり、松下雄之輔（翠幹）や木村貞吉（雲山）等の弟子を育成し、共に明治十七（一八八四）年の第二回内国絵画共進会に出品している。鋸南町上佐久間の日枝神社には松下雄之輔筆による「天岩戸図」が残されている。

茂原市真名の天照大神社に伝来する「天岩戸図」（茂原市指定文化財）は銘文から文政十三（一八三〇）年に製作された絵馬であることがわかっている。この絵馬は、縦一三三センチメートル・横二



天照大神社 天岩戸図絵馬

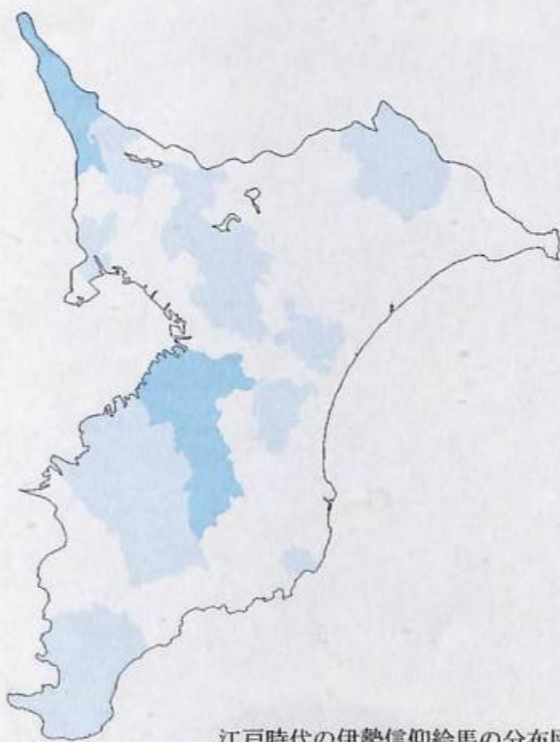
七七センチメートルもの大絵馬であり、専門の絵師の手によってなったものであると考えられている。天照大神がまさに岩戸から出御される瞬間をダイナミックに描き出している。

絵馬から見た伊勢信仰の分布

現在の市町村名内で一枚以上の絵馬が伝来している地域には色を入れ、その中でも特に伝来数が三枚以上の市町村には濃く表示している（以下全図にあてはまる）のがこの表である。

江戸期の伊勢信仰に関係する絵馬の分布を見ると、嘉永六（一八五三）年の香取市佐原の諏訪神社に伝来する「天岩戸図」二面と天保四（一八三三）年の御宿町上布施の八幡神社に伝来する「伊勢神宮参詣図」等の一部の例はあるものの、概ね県の西側に多く分布していることが見て取れる。その中でも、局地的に伝来数が多い部分がある。下総北西部の北部の野田・流山地域、上総北西部の市原市である。市原市内でも、伊勢信仰に関する絵馬は北部の東京湾岸沿いでのみ確認できている。

この核となる地域を中心に周辺の地域には絵馬の所在が確認できる。江戸期の絵馬は年数を経過しており伝来しなかった物も予測されるので断言は難しいかもしれないが、江戸期の伊勢信仰は、下総北西部の野田流山地域



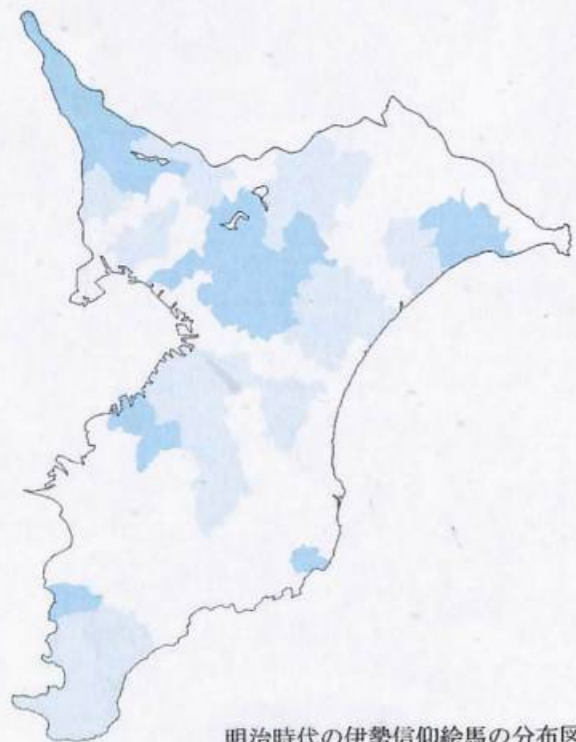
江戸時代の伊勢信仰絵馬の分布図

・上総北西部の市原北部地域を中心に伝播してゆく様子がうかがえる。

この事は、絵馬の奉納された時期からも見る事が出来る。享和と文政年間（一八〇一〜三〇）の初期の伊勢信仰絵馬が下総地域では、野田・流山地域にのみ伝来している事例とも重なってくる。これらの絵馬は、すべて太々神楽奉納にまつわる絵馬であり実際に伊勢参宮していたことも確認できる。最も古い太々神楽奉納額は野田市木間ヶ瀬の白山神社に伝来する「伊勢太々神楽奉納額」で享和元（一八〇一）年の絵馬である。

一方で上総の場合、初期の絵馬は、袖ヶ浦市永地の八幡神社「天岩戸図」、市原市の飯香岡八幡宮「伊勢神宮参詣図」（前述）、君津市平山の大神神社「太々神楽図」、茂原市真名の天照大神社「天岩戸図」、御宿町上布施の八幡神社「伊勢神宮参詣図」などと広い地域に初期の絵馬が伝来している。初期伊勢信仰絵馬が制作される頃には、伊勢信仰が流布している様子が見て取れる。それらの絵馬の中で、実際に伊勢に参詣したことが確認できる絵馬は、市原市飯香岡八幡宮と御宿町八幡神社の参詣絵馬の二面である。

明治期の分布図を見るとこの時期には伊勢信仰絵馬の分布は下総全域に及ぶ勢いで広がっていることに注目できよう。江戸時代には印旛沼東側への伝播が確認できなかったが、明治期になると印旛沼周辺に多く確認できるのが大きな特徴である。



明治時代の伊勢信仰絵馬の分布図

伊勢信仰絵馬の奉納数も、最も明治期が多く確認でき、千葉県では明治期に最も広く伊勢信仰が広がったことを如実に物語っている。下総北西部の野田・流山地域の絵馬の奉納数も増加している。その余波は、柏市・我孫子氏・松戸市などの近隣市町村に波及し、従来の野田・流山に周辺地域を加えた広い地域で伊勢信仰絵馬は奉納されている。

同じく下総の中部地域では印旛沼の南側の佐倉市を中心に絵馬の奉納数が飛躍的に増加している。この地域は江戸末期の天保から慶応年間（一八三〇〜六七）の第二期に絵馬が奉納され始めた地域で、千葉市若葉区川井町の第六神社「伊勢参詣図」嘉永五（一八五二）年や佐倉市羽鳥の甲賀神社「伊勢太々講中額」安政二（一八五五）年などの絵馬が確認できる。これらの地域では、明治期に入ると多数の神社に伊勢信仰絵馬が奉納されはじめ江戸後期に興った伊勢信仰が明治期に入り激増したことを物語っている。特にこの甲賀神社の「伊勢太々講中額」は印旛地域で最も古い絵馬であると共に、奉納された安政二（一八五五）年にはこの地に「伊勢講」が組織され機能していたことを示している資料である。この印旛地区での初期の「太々講中」の影響により、印旛沼南部である佐倉市・四街道市・八街市・富里市などへ波及していったとも考えられよう。

下総東部でも、江戸期には絵馬が確認できなかった地域であった旭市が、下総東部の絵馬の奉納の拠点として目立っていることも注目できよう。旭市の南部の匝瑳市にも二面伝来している。また、横芝光町宮川の熊野神社にも奉納時期が不明な参宮絵馬が存在し、明治期には下総東部でも広く伊勢信仰絵馬が奉納されていたことが確認できる。

上総地域では、かつて盛んであった市原市の絵馬奉納数が減少し、代わりに袖ヶ浦市が増加している。市原市内では減少しつつあった伊勢信仰が、袖ヶ浦市に伝播して広く行われていた

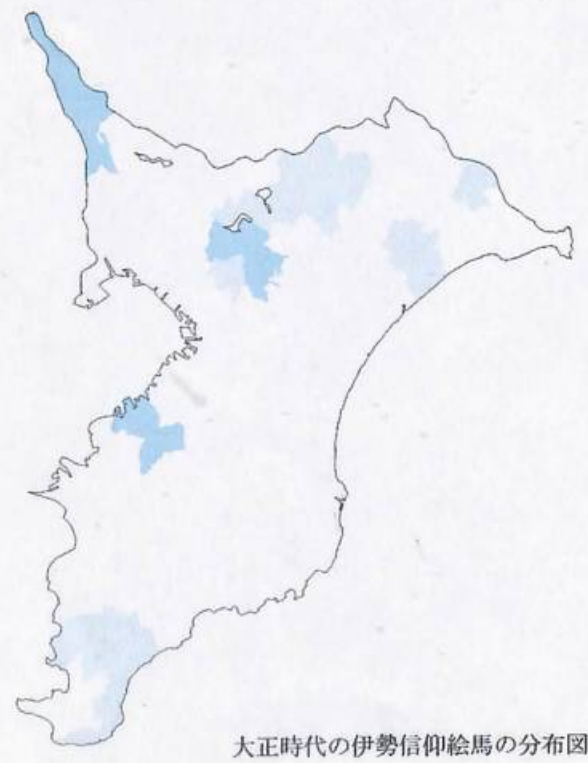
と考えられる。御宿地域では、江戸期よりも絵馬奉納数が増加し、伊勢信仰が盛んになってゆく様が見られる。

安房地域でも、全体的に絵馬の奉納数は増加し、江戸後期より始まった伊勢信仰絵馬の奉納の伝統が、明治期に最も広く流布した様子が見られる。特に鋸南町では絵馬の数が著しく増加しており、安房地域の中でも鋸南町が中心的事であったことがわかる。

明治期に最盛期を迎えた絵馬の奉納は、大正時代になると目に見えて減少してくる。大正期は時期的に短い事にも左右されるが、昭和期の分布図と比べてみると、明らかに明治より大正、大正より昭和と伊勢信仰絵馬の奉納が減少してゆく様が見られる。

明治期に飛躍的な増加を見た野田・流山地区・佐倉市・袖ヶ浦市が局部的に多い奉納数を維持しているが、他の地域では減少している。

残存数から見ると、袖ヶ浦市内の大正期の伊勢信仰絵馬は三面であり、明治期の六面から考えると、伊勢信仰が衰えてゆくかのように見えるが、次の昭和期では八面と増加することを考えると、大正年間が短い事を勘案すると、継続して袖ヶ浦市内では増加していると見るべきであろう。同様の事が明治期十五面、大正期十面伝来する流山市でも指摘でき、昭和期に入ると十三面と増加することから、野田市内では減少の一途をたどる絵馬の



大正時代の伊勢信仰絵馬の分布図

奉納も流山市内では継続して行われていたことがうかがえる。

昭和に入ると伊勢信仰絵馬はますます奉納数が減少し、伊勢信仰も衰退してゆく様が見受けられる。かつての伊勢信仰の拠点であった野田市や佐倉市でも減少は著しい。

その全県下で減少が著しい中でも、流山市・袖ヶ浦市内では絵馬数が増加している事実が興味深い。この両市では県内でも早い時期の伊勢信仰絵馬が確認できる場所でもあり、古くから根付いてきた伊勢信仰が、昭和初期に至っても継承されていたと理解することが出来よう。



昭和時代の伊勢信仰絵馬の分布図

参考文献

・『絵馬』岩井宏美 法政大学出版部 昭和四十九年
・『日本の絵馬』岩井宏美・神山登 河原書店 昭和四十五年

・『お伊勢まいり』西垣晴次 岩波新書 昭和五十八年
・『そでがうらの絵馬』袖ヶ浦町郷土博物館 昭和五十八年
・『まがじん市原』第十七号 まがじん市原社 昭和五十八年十一月二十五日号
・『五井、姉ヶ崎の凧 雪山（辻儀三郎）の遺したもの』駿河の凧の会編 昭和六十一年
・『安房地方の絵馬』館山市立博物館 平成四年
・『安房の人物シリーズ① 川名楽山』館山市立博物館 平成五年
・『いちにはら職人づくし(4) く絵師く』南総公民館郷土史教室 平成十四年
・『武者絵 江戸の英雄大図鑑』渋谷区松濤美術館 平成十五年
・『房総と熊野』袖ヶ浦郷土博物館 平成十九年